

二次元ぷち文庫

穢れた血の勇者
シャロット

千夜詠

表紙イラスト：ひなくま

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『穢れた血の勇者シャロット』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



穢れた血の勇者
シャロット

千夜詠
表紙／ひなくま

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

シャロット

世界を救う勇者になると運命付けられた少女。魅力的な容姿に加え、少しおてんばな所もあり、皆にも慕われている。

それは彼女の見たことのある動物の中で最も巨大であった。錆ついた鋼のようなくすんだ灰色の鱗を全身に纏う手足のついた蛇。その長く伸びた首の先端にある頭部に、ゴツゴツと幾つもの角を生やし、そこには歴戦の証である古傷が無数にあった。大人一人をたやすく飲み込める口から鋭利な牙が覗け、縦長い瞳孔が不気味にこちらを捉えて睨みつけてくる。長き眠りを妨げられたせいも、いささか不機嫌そうに殺気を漲らせていた。

（これが……ドラゴン！）

神に匹敵する力を持った生物の王。シャロットは畏怖の念さえ感じずにはいられなかった。

だが、怯えはしなかった。激しく流れ落ちる滝の裏側に隠された洞窟より、幾多のトラップを破り、立ちほだかる魔物を打ち倒してきた自信を彼女は身の内から溢れさせていた。これは、やがて世界を救うであろうといわれた可憐な勇者シャロットの最初の試練なのだ。

神、あるいは太古の人々が創り上げたほの暗い迷宮の最深部に彼女はいた。このドーム状の広い空間の壁は淡い光を発して、麗しき天使のような少女の姿を浮かび上がらせている。

プラチナブロンズの僅かに癖のある肩に掛かる髪。少し吊り上がった大きな濃緑色の瞳はあどけなさの残る顔立ちにあつて気の強さを感じさせた。小柄でスリムな発達途中の体

ながら女性らしい丸みを帯びていて、しなやかで健康的な色香を発している。戦いを宿命づけられた者にはまったく不釣りあいなきめ細やかな美しい肌をエルフの仕立てた純潔を象徴するような白いミニドレスに包み、その上からドワーフが加工した胸当てを装備している。どちらも軽く動きやすい上に、ミニドレスは魔法攻撃に耐性を持ち、銀色の胸当てはあらゆる物理攻撃を跳ね返す青い宝石がはめ込まれていた。

キリリと睨みつけてから間合いを計った。闘争心を剥き出しているような竜の瞳から眼を逸らすことなく、シャロットは腕の長さいっぱいの長剣を抜いた。

直後、竜が先に攻撃を仕掛けた。

「くっ……このッ！」

避けるべきところを少女は剣を振り上げていた。刹那、己の判断ミスを悟る。

（なっ……早い！）

灰色の竜頭は刀身を叩きつける反応よりも先に眼前に迫り、視界は完全に遮られた。

バチバチバチ……ッ！

全身に巨大な鉄球に砕かれたような重く激しい衝撃が走った。ブレストプレートの魔法障壁が挟られているようで魔力の火花が散っている。

弾かれているのは自分の体だ。このまま後ろの壁に叩きつけられれば、いかに優れた防具に守られていても無事では済まされない。

「こ、このお……やられて、たまるもんですか！」

柄を素早く握り直した。先端を灰色の鼻先にあて、そして力いっぱい突き立てた。

グオオオオオ……。

竜の咆哮が地下空間に響き、一帯が震え揺れる。脆弱そうに見えたであろう人の子から受けた渾身の一撃に竜の頭は軌道大きく逸れて、のたうつように長首を激しくくねらせた。シャロットの小さな体は、その勢いに大きく宙に飛ばされて、そのまますすすべなく地に叩きつけられる。だがこの程度の衝撃ならば大した問題ではない。全身の筋肉が鈍痛と激痛を繰り返し訴えてきたが、キツと暴竜を睨みつけて立ち上がった。

「私だって、神の血を引く者。貴方くらい倒せなくて、我が使命果たせるもんですか！」
しなやかな左腕をさっと前へとかざし伸ばす。フーと一息吐いた後、彼女は呪文の詠唱に入った。

「古より大気を司る原初の者よ、我が心の言の葉に伝えてその大いなる力を現さん。暴虐に溺れる哀れなる者に、永劫なる眠りを……インドラ！」

竜の頭上に暗雲が現れ、渦を巻く。その中心から放たれた電撃が耳を劈く音と共に灰色の鼻に落ちた。突き刺さっている剣が避雷針となる。雷は収束して巨体を内から焼き尽くしていくのだ。

ガッ、ゲガアッガア……。

竜の瞳が白目を剥いた。暴れまわっていた体は痺れきって機能を停止していく。力なく崩れるように倒れて、ドスンと大きな衝撃音と同時に地が揺れた。ジューと焼けるような音と、バチバチと電気の弾ける音がまだ聞こえる。竜は動かない。

「か、勝った……」

気が抜けた途端、その場にヘナヘナと座り込んでしまった。強敵との命がけの戦いに勝利し、また一つ強くなった気がして充実感に包まれる。

目指したものは長い竜の尾の向こう側にある。ドーム状の地下空間にある小さな窪みに作られた祭壇。そこに置かれていたのは銀色のサークレットだった。

「これが……母様の……」

物心ついた頃より求めてきた母を感じさせる品を前にして、シャロットの胸の内に想いが溢れ、果敢な勇者から一人の子供に帰っていた。成長しきれていない少女の心そのままに童女の表情を浮かべて瞳に涙を溜め込んでいた。

サークレットを胸にそっと抱きしめるようにして、一時優しく切ない気持ちを味わっていたが、ふと気がつくと言みの更に奥の穴から淡い発光があった。

（何だろう？）

まるで自分に気づいてもらうために存在を主張しているかに見える、彼女はゆっくりと腕を伸ばす。直ぐに硬い握りの感触があった。しっくりと手の平に馴染む。なくしてしまっ

た愛剣をようやく見つけたような気持ちになって、シャロットはそれを引き抜いた。

「ああ……」

それは純白の美しい長剣であった。柄の部分に四精霊のレリーフが刻まれ、細身ながら刃渡りは腕に余るほど長い。

頭の中に荘嚴な声が響く。

『我は、ダークイーター……。邪悪なる闇を喰らう者なり。真に光ある者にのみ力を貸そうぞ……』

純白の長剣から淡い発光が消えていくと、その辺りもまた静まり返った。握り締めた美しい得物を見つめて、その鞘に手を掛ける。ダークイーター、それがこの魔剣の名前であるのは間違いないさそうだ。その刀身の本体を確認したくなって、引き抜こうと力を込めた。「んっ、うんん……。な、なぜ抜けない、のッ！」

物理的に張りついているというよりは、何か特別な魔力のようなものを感じる。まるで元から一繋がりであるかのように鞘は鏝元から離れようとはしなかった。

（私が、まだ未熟だから、なの？ それとも……）

真に光ある者にのみ……。その言葉が気に掛かった。

四方を連峰に囲まれて、外界より閉ざされた深い山間に静かな村ウイドーがある。シャ

ロットはここで育ち、まだ外の世界へと出たことがない。産まれた場所は定かではなかった。だが彼女を育てた老夫婦の話では、突如眩い光と共に現れた運命の神フォルトによって預けられ、慈愛の女神ティアナの落とし子であると彼は語ったという。

更にフォルトはこう予言を残している。

『魔界の王による地上への進攻は食い止められた。だがそれも一時のこと。やがて世界は魔の物で溢れ、現世と地獄の区別はなくなるだろう。しかし案ずることはない。ここに希望がある。この子、シャロットが成長したその時、彼女は世界を救う勇者となるであろう』

自分の出生について聞かされたのは彼女がまだ四歳になったばかりの頃だ。小さな村の人々は皆その事実を知っていた、何故なら彼らはフォルトの声を聞き、選ばれた者達でシャロットを一人前の勇者として育てる役割を担っていたのだ。それゆえ彼女は誰からも愛され、時に厳しく、大陸を渡り歩いた戦士より剣技を、孤高の魔術師より強力な呪文を、聖地の元神官長から道徳を学び今日に至る。

帰路の途中の森の中にある湖で顔を洗ったシャロットは、手に入れた母の形見ともいっべきサークレットを額にあててみた。透き通る水面に映し出された顔を見て呟いた。

「母様……」

何度か自分は母である女神ティアナによく似ていると言われたことがあった。思えばこゝういった女の子らしい装飾品を身につけるのも初めてで、性格もしおらしいとはとても言

えない。かなりのお転婆娘で人一倍気も強い。普段身に纏っていた男物の服装ならば、美少年にも見えただろう。

だが今湖水に映っているのは、誰もが疑うべきもない可憐な美少女だ。エルフのミニドレス。迷宮の中で手に入れたこれ一つで随分変わってしまった自分の印象に彼女自身が戸惑ってしまう。

「こ、こんなに丈が短くて、いいの？　むうう……司教様に叱られそうだよ……」

視線を落とした先には、白く健康的に引き締まりながらも、女性らしく丸みを持って柔らかそうな、むっちりとした太股が半分以上剥き出しになっていた。村を出発した時に身に着けていた野暮ったい作業着のようなものは、迷宮の探索中に襲ってきた魔物に焼かれてしまったので着替えようもない。対策は帰り着くまでにゆっくりと考えよう。一つの試練を乗り越えた安堵が、のんびりと穏やかな気分にかけていた。

池のほとりを後にしようとして立ち上がったその時、シャロットは黒煙が幾つも立ち昇っているのを見た。

（あれは……村の方……!?!）

嫌なイメージが頭の中を駆け巡る。風が乱れ流れて、森の木々に宿った精霊達がざわついていた。

何かが起きている？　そう思った瞬間には走り出していた。焦燥を感じながら引き

怒りの叫びも心の内にだけ籠った。なすすべはない。生理現象で出ている涙に、悔しさの熱いものが混ざっていた。

両肩ががっしりと捕まえられると、視界が急に高くなる。一度立てさせられ、プラチナブロンドの髪がふわりと流れ降りた。一日裾が下がったことには一抹の安堵があつたが、ぐるぐると自分の周りを回るムテンオウの様子に不穏なものを感じずにはいられない。

「けがらわしいドワーフなどの作つた防具など、姫様には無粋この上ない」
身を守る要であるブレストプレートが外される。白いミニドレスだけが残つて、小振りながら形よい乳房の膨らみが現れた。

「あふあ、な、なにすぐうう……」

まともに喋れぬことを知りつつも思わず舌を動かして、またねちよりと唾液で唇を濡らしてしまふ。

絡みつく視線が緩やかな隆起の姿態を舐め回す。動きやすく体にフィットするようなエルフの素材では、女性らしく成熟し始めた姿態が浮き彫りになって、胸元に下着を身に着ける習慣のないシャロットの敏感な先端突起さえ確認できた。

「これはまた可愛らしい……」

武人らしからぬニヤつきを浮かべて魔將軍は呟いた。悪寒と同時にまたしても顔から火が出るように真っ赤になつた。

（そ、そんなところばかり、見るなつてば！）

ムテンオウの肉棒がまたピクンと反応をしている。顔を背けることも目を瞑ることもできないので、無防備に入り込んでいた。

「まだまだ姫君らしくない姿であるな。どれ……」

両手が上げさせられ、手首が頭の後ろに交差される。短い袖口がずれて、汗ばんだ腋の下が覗けてしまう。生地が後ろ上に引かれてしまうので、その分柔らかな乳房が圧迫されて愛らしい乳首が目立ってしまった。

（な、なに……こ、この姿!!）

更に膝が折られて半立ち状態にされていく。股が左右に押し開かれていくと、ズルズルとまたミニ丈が腰に向けて上がり始め、小さなショーツ一枚の股間が剥き出しになる。狭い中央部が僅かに皺になって陰部のワレメに潜り込むかのように移動していた。極端に薄いせいで恥毛は覗けてはいないが、その分まだ発達途上な大陰唇の土手肌が露なのだ。

「あぐあ、はあ、はあ、はあ……」

下腹部から異様に熱い。一日穿いて蒸れきつた下着の奥からじつとり汗ばんで、ムンと湿気籠った股間の臭いが漂ってくる気がしてならない。堪らなく羞恥が煽られて、呼吸の乱れが治まらない。

抗うどころか、苦悶の表情すら浮かべることのできないシャロット。心の内では何度も

羞恥に絶叫をあげていた。

(あつ、ああ……なんて、下品で、淫らな……。こんな格好……いやアア……ッ)

目の前に禍禍しい肉の巨棒が突きつけられている。あの酸味のあるどこか猥褻な臭いがそこから鼻腔を刺激した。黒々とした先端は先割れていて、そこからトロリと半透明な粘液が漏れ垂れている。

「さあ、シャロット姫よ、魔族の女の最高の食事を差し上げますぞ」

涙を流し続け、閉じることのできない瞳に映されたグロテスクな肉塊の先端が、更に顔に近づいた。

(ひ……っ！ な、なにを……!! んっ……やめっ……やめて……っ！)

顔の半分にも相当するような肉棒の先端が柔らかな唇に当たり、グリグリと押してくる。瞬間に背筋が凍りつく。女神似と言われた美麗の顔は口にしたことはないが密かな自慢でもあった。

(こんな、き、汚らしいものに……ああ……だめええええええッ！)

硬いが確かに肉の感触だった。余りにも生々しく生臭い。先端に押されて桜色の唇が開かれていく。閉じようと力を込めても顎は動く気配すら見せなかった。

「これ以上は、入りません……か？」

大きく口が開ききったところで、押し込まれる感覚はなくなった。これ以上ないくらい

唇が開かれて顎が外れてしまいそうだ。吐き気のするような肉棒の腐臭に咽せるが、何故か口内にはドクドクと唾液が溢れてしまう。

（わ、私の唇に……こ、こんな汚らしいものがア……）

性の知識など皆無に等しいシャロットとって、男性器を口に含むなどといった発想があるはずもなかった。村の女の子達の話から子供が生まれる仕組みをようやく知ったくらいなのだ。

肉棒の先端が僅かに押し込まれた唇の端から、だらりと唾液が漏れ出始めた。教えられてきた淑女には程遠い醜態に恥辱の想いが込み上げてくる。

節くれ立った指を持った魔将軍の手が逸物を握り締める。ゆっくりと前後に動かしているようだった。

（いやあぁッ、な、何しているのよお！　うう……）

柔肌だけは敏感に鳥肌が立っている。今の状態は弄ばれる肉の玩具のようで、息苦しくて呼吸が荒くなった。溢れ続けている涙が亀頭の上部を濡らして、抑えられない涎が下部を伝ってネットリと糸引いている。

肉棒を擦る手の動きにつれて唇が震わされる。何が起るのかまったく予測できないのであるが、汚辱の予感だけは膨らんでいった。

（いやよ！　いや、いやぁッ！　じゅ、呪文で……）

呪文の詠唱は口箆っていても関係はない。精神の集中と魔力の強さでカバーできるはずだった。問題は一つ。押し込められた肉棒の先端に当たるのを本能的に拒絶して、今は舌を引いている状態なのだ。だが今は躊躇っている場合ではない。意を決した。詠唱のために舌を蠢きだす。

「あぐア、うぐうア……あうう……」

予想通り舌先が肉張りに当たってしまう。意図せず鈴口をチョロチョロと刺激して、そのつど牡性器はピクンピクンと反応を示した。

（あひいいッ、き、気持ち、悪いいいッ。う、うぐううう、で、でも……）

ぺちや、ぬちゅ、ちゅ！ 肉棒の先端から漏れ出る半透明の腐粘液を舌が掬ってしまう。舐め這うような動きを続けると、微かなしよっぱさが口内に広がって、喉の奥へと伝っていくのだ。

（うひい……ヒリヒリ熱いい……ッ……。お口に入るううッ。くはアア……だつて、これ……）

おしつことは違うのだとは分かった。でもやつぱり不浄なもので、魔物がいやらしい気持ちで流しているものに違いない。ただ先ほどから、どうも下腹部からこそばゆい感じがあり、何か火照るようなのだ。

「おお、姫君自ら我を刺激して下さいか。なかなか宜しいですぞ。ドスケベに惚けた顔が

見られぬのが、いささか残念ではあるな。くく……っ」

もの凄くいやらしい行為をしてしまっているのだと意識して、燻っていた熱が胎内で燃え上がるように疼いた。

(やああああッ、違ううう、違ううう、違ううう、違ううう、違うううッ！)

じゅちゅ、ぬちゅる、ちゅちゅ！ 舌先を動かすたびに、ねちよりと口内で粘液が絡みつく。

「さあ、もつとしつかり味わい下さい、姫様」

不意に後頭部を両手でしつかりと掴まえられて、その直後、

「あぐえ、うぐうううッ、あぐううッ！」

ズにゅズズッ！ 先端の盛り上がった部分が、すつぽりと口内に納まって、行き場をなくした舌は裏返って喉奥に押し込まれてしまった。

「ふぐううッ、はぐう、あぐあああッ……」

苦しさにのたうつ舌が肉棒の先をヌチュルと舐め回しながら叩いてしまう。

「はは、ほらほら、もう少いで、美味しい牡汁を差し上げますぞ」

にゅズボボッ！ 肉張の先端が強烈な勢いで喉奥を叩きだした。ズンズンと何度も押し込まれるたびに、激しく脳が震わされていく。ブシャブシャ唾液を迸らされ、激しい嘔吐感に胃が引きつける。

(しゅ、集中うう……無理いい！ いやあああッッ！)

あともう少しで完成する詠唱が途切れた。その直後、ビクンと肉棒が大きく跳ねる。ズツと一段大きくなってようで、

ドブツ！ ドバドバドバツ！

濃厚に粘りつく液体が刹那口内に大量噴出されたのだ。

(あひやああああアア……ッ！ ドロドロっ、いひいいッッ!?)

頬が一瞬で膨れ上がり、きつい腐臭が鼻につく。肉棒が引き抜かれると、ぽっかり開いたままの口から、ダラダラ白濁が零れて顎から喉へ、そして胸元へと垂れ落ちていった。ミニドレスの生地にも染み入って、上半身がヌメヌメと粘りつく。ほんのりと透けて内側の柔肌の色調が浮かび、控えめな乳房の先端を汚水が垂れ舐めていた。

(うひアあ……き、気持ち悪い……。いやああ……ッ)

顔も頬の筋肉も動かせない。この正体不明のとても猥褻に思える汚濁を排出したくて舌を動かすが、ネチヨネチヨと絡みつくだけで悪寒は膨らむばかりだ。喉に烏賊臭い粘液が絡みついて息苦しい。鼻で荒く息をするその姿が、まるで興奮し尽くした淫乱牝であったことに気づけるはずもなかった。

「ははは……、そんなに嬉しいのですか、姫様。おっと、このままではせつかくの牡汁が飲み込めませんな。どれ……」

顎が上げられながら口が閉ざされる。鼻が摘まされると、堪らず喉が鳴った。

「うっ、ぐうう……ぐほッ！」

頬に溜まっていた大量の腐水が、喉をザラつかせながら食道を抜けていく。

(いやああああ……ッ、熱いいい！ お腹あッ、あつ、熱いいッ！)

胃の中が燃えるようだった。熱気が全身に伝って、どっと汗が噴出してくる。頬が桜色に染まっていた。腋の下の窪みと剥き出された内股から珠の汗が滲み光り、下腹部で噴出したものは薄い下着に吸い込まれる。ほんのりと透けだして、縦スジの白肌色が現れた。

その意味もよく知らぬ秘裂の奥の細穴がじんわりと痺れながら弛緩していく。その周辺が最も熱く、でも何故だかとても心地良いのだ。ジーンと震わされるような感覚になつて力が抜けていく。その瞬間、呪縛の罫が解けて崩れるように倒れ込んだ。

「ハアあああ……、いったい、何が……あはア、ああ……」

意識が遠のいていく。朦朧としかけた中、魔将軍の声が聞こえてきた。

「姫君は少し人間の薄汚い貪欲な本性を勉強なさるといい。くくッ……」

せめて一太刀。その想いだけで腕を引き摺り動かした。そこにあるはずの足掻く力。ダークイーターは消えていた。意識は完全に闇の中へと潜り込んでいく。

*
*

「ささ、こちらへお入り下さい。姫様」

腕が、心を締めつけるほどに圧迫するのに、鼓動が高鳴り、注ぎ込まれた精液を洗い流すほどに牝汁が溢れてくる。

落ち着かない様子で、キョロキョロと逃げ場を探す。みつともなくよろめきながら、筋肉の林を一旦抜けた。

「ほら、待てよ」

何本もの手に、腕と足が同時に捕まえられた。

「いやあッ、離してえッ」

あっさりとは四つん這いの状態に組み敷かれる。すぐさまお尻ががっしり押さえられ、硬直しきった肉棒が濡れワレメにあてられた。ゾクゾクとした陵辱の予感に捉えられて身動きできない。

「ひひ、犯されていつちまったド淫乱は、やつぱり無理やりされるのが好きなのか」

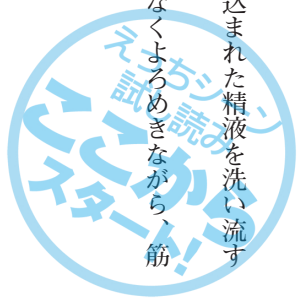
「ち、違おう、た、助け、はうううッッ！」

ズニユ！ ヌチユジュポポッッ！

「いやあッ、ああ……」

一度なめされた肉壺は、先ほどよりもすんなりと男を受け入れた。成熟途上のきつい膣道は、直後に肉棒をしっとり包み、内壁全体で舐めていく。

「くう、シャロットとやれるなんて夢のようだぜ。ほうら、何度でもイかせてやる」



重い衝撃が下腹部で走り回る。再び犯されている悦びが肉体を駆け巡って、鋭い快感が脳天に突き刺さった。生涯二本目の肉棒に、犯され癖のついてしまった幼媚体が悦び震えてしまう。

(あふうううッ！ またおかしくなるうううッ……)

肉棒の先端が子宮の奥まで入り込むと、もうそれだけで背筋が跳ね上がる。

「うあひやあッ、イカされちゃううッ！ 犯されてえ、また逝っちゃううッ」

スパンッ、ズパンッ！ 男の固い骨盤が、柔らかな秘裂の微肉に叩きつけられる。ブシュッとそのたびに牝汁が逆り、男の下腹部と太股を湿らせた。

「さすが淫乱の血筋だな。やってるこっちが恥ずかしくなるくらい腰を振りやがる」

被虐の火を点けられた。貪欲に快楽を求めて、子供じみた秘貝が強張りを貪り始める。半開きの瞳から漏れ出ていく涙が、シャロットの神聖を洗い流していくようだった。

ドブッ、ドバ、ドブドブドブ！

きつく食い締める肉壺があっけなく男を昇天させる。

「いやああッ！ もう、やらああッ」

膣奥に注ぎ込みながら恍惚の表情を浮かべる男を振り払った。決して容量の多くない女壺から逆流する白濁水と、止まることを知らぬ蜜液を垂れ流しながら、みつともなく這いずり回る。

「へへ、ほらほら、捕まえちゃうぞ」

剥き出された乳房も股間も隠すことも忘れ、狂気する生け贄勇者を男達はわざと逃げ道を与えては追い詰める。

「やあああッッ、助け……もう、やめええええッッ！」

陵辱感を煽られて、呼吸が激しく乱れていく。誰よりも強くあれと育てられた心と体は今、強引に征服される期待に疼ききつていた。打ちのめされ、打ちひしがれる歪んだ幸せに、身の内から被虐の炎が煌煌と燃え盛る。

伸ばした手が鉄格子へ掛かろうかというその時、足首が掴まえられた。

「いやああああッッ……」

そのままズルズルとうつ伏せたまま牢獄の中心まで引き摺られ、弄ばれるまま捕らえられた。美味しそうな子羊は、まだ自由になる片足を床に滑らせて惨めに喘ぎ、露出された柔らかな球体のお尻の合間から、あどけない顔に似合った幼陰を覗かせている。

野獣の涎がポタポタと未成熟な姿態に落ち汚してくる。尻肉を垂れて谷間から肛門へ、そしてワレメから滲み続ける蜜液に混ざり込んでいった。

「あうう……あ、ああ……」

引き攀った顔をあげた途端、自分を取り囲んだ無数の欲望滾った瞳に気づいた。

この人達全員に、犯されちゃう！

「ひやうあああッツ！」

ブシャ、ブシャシャシャ！

大量の牝汁をスプラッシュしてビクビク身を震わせた。奥残った白濁までも押し流し、桜色の縦スジを中心に淫水溜まりが広がっていく。

「うひゃひゃ、このマセガキ、入れてやる前から一人でイっちゃまったぜ」

「この年でこんなドスケベな体していたら、末恐ろしいねえ」

「魔王は倒せなくても、これなら世界の半分、男だけはこの猥褻な体で救ってくれそうだな」

なんと恥ずかしくて浅ましい体なのだろう。肉壺はまだヒクついて、ダラダラと牝汁を吐き出し続けている。卑下される言葉が柔肌に染み込んで、愛撫されているように体の芯が熱くなってしまふ。

「ほら、いつまで惚けてやがる。さっさと尻を突き出しやがれ。淫乱なお前の望み通りに、廻り尽くしてやるからよ」

パシッとお尻が叩かれる。柔らかかにプルンと震え、痛みに一瞬身を強張らせた。だが直後、ジーンと染み入る余韻が被虐の悦楽を露骨に表させる。恍惚に瞳潤ませ、ゾクゾクとする強姦の期待に、もはやマゾ牝の本性を隠しきれない。

（あはあああ、怖いのに、こんなこと嫌なのに、なんで、気持ちいいのお……）

上半身を冷たい石床に押しつけたまま、オズオズとお尻を高く上げていく。横を向いた頬は上気して桜色に染まり、プラチナブロンドの髪が悩ましげに落ちていた。

「グズグズすんじゃねえ！」

パシッ！ きめ細かな白い尻肌に見つ赤な手形がまた付け加えられた。

「はうッ！」

火照り冷めぬ体が、平手の衝撃に快感を覚えてしまう。浮き上がらせた下腹部から先ほど噴出した淫水がポタポタ滴り、そこに新たな発情の牝汁を加えていくのだ。

「へへ、ケツの穴まで丸見えだぜ。ここもなかなか可愛いじゃねえか」

マゾ牝勇者の排泄口は垂れ伝った愛液で濡れそぼち、甘えねだるようにヒクついていた。

「み、見ないでえ……ひっ、ひいッッ！」

ヌブ、ジュボボッ！

くすんだ桃色の肛皺が圧迫を感じた直後、指先が捻じ込まれた。

「ひぎいいいッッ……お尻の穴……、やつ、やあぁッ……」

ジュブブブッ！ 肛皺をめり込ませながら容赦なく奥まで抉られる。きつい異物感と重痛が直腸内で響いて、甘美な魔悦に力が抜けていった。小さく喘ぐ唇から涎が漏れて床を汚している。腸粘膜を削ぐように指先を蠢かされると、全身が震えてうっとり酔いしれそうになってしまう。

(ふあはあ、き、汚いのにい、お尻の穴で、へ、変に、なっちやううッ)

この魔悦は本能で危険だと察知した。だが逃げ出せない。危ないと思えば思うほど、虐楽に浸った肉体はそれを知りたくて堪らなく疼いてしまう。

「淫乱な勇者様はこんな所も感じやすいようだな。美味しそうにヒクついてしゃぶつてきやがる。でもこんなもんじゃ、物足りねえんだろ」

引き抜かれた次の瞬間、代わりにあてがわれたのは指なんかよりもっと太くて熱いものだった。

「あっ……ああ……。や、や、やらあ……、ひぐっ！ あぐああああッッ！」

ヌボボボッッ！ ブジュブジュボッッ！

肉棒が強入され、強烈な魔悦が奥へと突き進む。

「あああああッ、入って、入ってくるうッ！ ひぎい……だめええええ……」

強烈な膨張感。自分で挿入されているところが見えなくても、直腸を満たしているものが熱くておぞましい男肉だとはつきり分かる。

(ひいひいッッ、こ、こんなのお、普通じゃないいいッッ！)

指先なんて比じゃない。その凶悪な肉魂がピクピクお腹で蠢いて、でもそれがこれから起こる暴虐をあからさまに予感させてくる。淫靡に呪われた被虐癖な肉体では、柔軟な腸粘膜がすぐさま甘えて、腸腰筋を舐め回していった。

（あうううう、へ、変なの、おお……お腹、熱い……）

貪欲なアナルは、もう既に肉の拡張を受け入れ始めている。僅かに痛み慣れだしたその瞬間から、異質な感覚は確かな快感に変わってしまうのだ。

「おらあ！ 淫乱勇者、いくぜえッッ！」

ジュポポポッッ！ 頃合を見計らっていたように、男の腰が前後にグラインドしだした。「あふううッ！ はあ、あはああッ、お尻い……犯されてるううッ……」

アナル処女などお構いなしの苛烈な腰振りで尻肉を叩かれる。その一突きごとに姦辱の悦びが増して、下半身からジリジリ痺れだした。直腸は本来の役割を忘れて、男を喜ばせる器官へと変貌する。きゆるきゆる粘膜ヒダで肉棒を喰らって、浅ましく刺激していくのだ。

「うほ、さすが淫乱女神の血を引くだけあって、ケツの穴までドスケベにできているようだな。へへ、感度も良さそうじゃねえか」

アナルの性感は陰部に比べて幼いうちから発達している。妖しい快楽の背徳が増長させて、心まで蕩けさせられそうだ。

「やあああッ、お尻いッ……こ、こんなところで、感じちゃ、ああんうう……」

苛烈なピストンに合わせてくねりだす肉体。娼婦顔負けに腰振り喘ぎ、愛らしくも淫らな生け贄は、魔悦を我が物として受け入れ始めている。

「うは、ハア、ハア、はあアア、だ、めええ……」

ねっとり濃厚な牝汁が、とろりと垂直に滴っている。石床に繋がったまま、どれほど激しく腰振られてもその液糸が切れることはない。

「こいつ、どんだけ淫乱なんだア。ケツの穴でグイグイ締めつけやがる。くうう」

快痺が体中に広がってフワフワと気持ちいい。全身からポタポタ汗滴る熱さなのに、柔肌伝う滴の感触さえもが愛撫のように感じさせてくれるのだ。

(ひあああああ……イ……きそ、ふあああああ……)

肛辱の魔悦に確実に導かれていく。脳内が悦楽の桃色に満たされて、淫靡な卑肉の思うがままお尻で肉棒を食る。

「あはああんツツ、いつちやううツツ、このまま……あぐうツツ、お尻いい、いつちやうのおおっ！」

その言葉を待っていたかのように男根の抜き差しは一気に苛烈さを極めた。

「おらおらア！ 淫乱牝豚アつ、ぶちまけてやるぜ！」

ブシャ！ ドブドブドババアアツ！ グシャグシャに掻き混ぜられた腸内に熱く牡汁迸った。

「イクうううツツ！ お尻いいいいツツ、イクううツツ！」

ぶるぶる全身震わせて、精液の芯まで搾り出させる淫乱アナル。ビクンビクンとお腹の中で跳ねる肉棒が美味しすぎて堪らない。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>